

平野昭先生

「ベートーヴェン生誕 250 年

～孤高様式の特性：1818～22年のピアノ作品～」

米山義則 愛知県立芸術大学大学院音楽研究科博士前期課程（音楽学）

1. はじめに

2020年度音楽学コースの特別講座として、静岡文化芸術大学名誉教授の平野昭先生をお招きし、2020年12月8日(火)18:00～19:30に、愛知県立芸術大学新講義棟にて、「ベートーヴェン生誕 250年～孤高様式の特性：1818～22年のピアノ作品～」という題目で講義をしていただいた。

平野昭先生は、日本におけるベートーヴェン研究の第一人者である。『ベートーヴェン(作曲家・人と作品)』『ベートーヴェン事典』(共著)など多数あり、新聞・雑誌などでの音楽評論活動も精力的にされている。

2. 講座の内容

本講義では、ベートーヴェンの《ピアノ・ソナタ第29番変ロ長調》Op.106、通称《ハンマークラヴィーア・ソナタ》において「孤高様式」が確立されたこと、そして、その後のピアノ・ソナタ Op.109,110,111の3曲をセットとして扱うことの意味などを中心にした講義であった。

ベートーヴェンの生涯はピアノ改良発展の歴史と重なっている。ベートーヴェンは1802年頃には5オクターヴ音域のピアノ(ヴァルター、61鍵)を用いて作曲を行っていたが、その後、エラール(68鍵)、シュトライヒャー(73鍵)、ブロードウッド(73鍵)と改良が進み、音域も6オクターヴに広がっていく。《ハンマークラヴィーア・ソナタ》を作曲する1817年頃になると、シュトライヒャー製のピアノを想定して作曲を行ったと考えられるが、それでも演奏不可能な低音をベートーヴェンは指定している。そしてその低音は同じ6オクターヴでもシュトライヒャーより低い音が出せるブロードウッド製で初めて演奏可能となるのである。しかし、ベートーヴェンはこれでも満足せず、《ハンマークラヴィーア・ソナタ》ではブロードウッド製でも弾けない音を指定す

る。もちろん、現代のピアノならば弾ける音域である。当時のベートーヴェンは近い将来さらにピアノの改良が進むことを予想して作曲を行っていることがこれらの事実から推測されるのである。見方を変えれば、《ハンマークラヴィーア・ソナタ》がピアノの発展に寄与したとさえ言えるような状況である。こうしたピアノ発展の歴史と併行して、《ハンマークラヴィーア・ソナタ》において「孤高様式」が結実する過程を先生は明らかにされた。「孤高様式」とは具体的にフーガまたは変奏曲の採用であり、《ハンマークラヴィーア・ソナタ》においては、終楽章やソナタ全体の規模拡大、厳格な論理構成、終楽章にフーガを採用するなど、革新に満ちた作品となっている。「孤高様式」は、《ディアベリ変奏曲》(Op.120、1823年)、《ミサ・ソレムニス》(Op.123、1822年)、《交響曲第9番》(Op.125、1824年)や後期の弦楽四重奏曲など12曲に見られる特徴であり、《ハンマークラヴィーア・ソナタ》に続くピアノ・ソナタ3作品Op.109～111においても見られるものである。

ベートーヴェンはこの3作品でもってピアノ・ソナタの創作を終える。1822年のことである。そこには彼が追い求めてきたピアノ・ソナタの集大成という意識があったと思われる。調性においても、《ピアノ・ソナタ第32番》Op.111の「ハ短調」を中心に据えると、《第30番》Op.109が長3度上の「ホ長調」、《第31番》Op.110が長3度下の「変イ長調」といった具合に互いに3度の関係にある。また、短調を1曲含むのも3曲セットの際の要件でもあり、もちろんフーガや変奏曲形式も採用されている。《第30番》では第3楽章に変奏曲、《第31番》では第3楽章にフーガ、《第32番》では第2楽章(最終楽章)に変奏曲が採用されている。特に最後のピアノ・ソナタである《第32番》では、第1楽章「ハ短調」、第2楽章「ハ長調」という構成が、《交響曲第5番》と共通するものがあり、「ハ長調」を選択し、しかも臨時記号もないというのも「音楽の原点」を表すものとしても非常に示唆的である。こうした様式は彼のピアノ・ソナタにおいては、《第27番》Op.90がOp.111のプロトタイプと見られること、ベートーヴェンのカンタービレ期、ロマン主義傾斜期を経てOp.101、《ハンマークラヴィーア》へと至る過程、さらには《ディアベリ変奏曲》のワルツと《第32番》第2楽章アリエッタが似ていることなどの指摘から、ベートーヴェンの後期孤高様式の特徴が先生の講義によって明らかに

されたのである。同時代の作品同士を比較する「横のつながり」と過去の作品との関連を見出す「縦のつながり」とで読み解き、さらにピアノ改良発展の歴史とも関連させながらベートーヴェンの音楽的特徴が明らかにされるという点で極めて示唆に富んだ講義であった。

3. おわりに

御存知の通り、2020年はベートーヴェン生誕250年の節目の年にあたる。コロナ禍という未曾有の状況下で、ベートーヴェンを記念する多くのコンサートやイベントが中止または延期された。そんな中で、このような極めて貴重な示唆に富んだ特別講義が、ベートーヴェンの誕生日とされる12月16日に近い時期に行なわれたことに対して、平野先生に改めて感謝申し上げたい。